

近代日本における青年の自我構造に関する一考察

—— 明治後期の青年像：その2 ——

加藤 潤

An Essay on the Conceptual Transition of Youth in the Course of Japanese Modernization.

—— Discovery of the conception of "Youth", in the late Meiji Japanese ——

Jun KATO

ABSTRACT

The conception of youth or adolescence can not be defined by only biological or even psychological process (Dornbusch, 1989). But it is rather social or cultural phenomenon (Mead, 1928, Aries, 1960). Especially the period of YOUTH can not be explained without putting it in the context of social change or industrialization process during the nineteenth century in the Western world. Such a sociological research has not been done for the Japanese modernization period. Only the work of KINMONTH (1981) is an outstanding exception. This paper argues that social conception of YOUTH was formed in Meiji Japanese (1868-1912). We specify the time in late Meiji era when intellectuals (Journalists or scholars) found that educated young people were going away from the former value or nation. Educated young people were separated from work place and no longer in the period of childhood. Instead they were in school and oriented to literature, philosophy and themselves. The older generation looked their behaviors as understandable and alarmed that the crisis of national integration was stemming from those young people. But some intellectuals found them from quite different aspect. They discovered the conception of YOUTH in the corrupted youth culture and their diffused psychological state and insisted on the importance of schooling as socialization institution. Since then, two incompatible thought on YOUTH has been on the argument among intellectuals until Japan went into militarism. One is to place educated youth in the authorized social moratorium period. The other thought sees young people negative even dangerous and want schools to be total institution in order to keep social integration as it was in early Meiji era.

1：序 考

青年期とは、産業化にともなう就学期間の長期化によって引き延ばされた結果生じた子供期と成人期との間隙を埋めるべく〈発見〉された新たなライフ・ステージである。したがって、〈青年期〉はたんに生物学的成熟過程のひとつであるのみならず、当該の社会構造や文化的条件によってその在り様は規定されることになろう。この視点はすでに社会学（アリエス、1960）、

文化人類学 (ミード, 1928) のみならず, 発達を重視する心理学の領域でさえ定着したものとなっている (エリクソン, 1959, 中川, 1959)。

こうした社会学的アプローチからの青年期研究は, アリエスの『子供の誕生』以降さかんに行われており, それらの関心は藤田 (1989) が指摘しているように「青年期構造が歴史的にどのように展開してきたか, 青年期構造は社会の変化とどのような相互作用関係にあるのか¹⁾」という点にある。換言すれば, ある社会, 国家の近代化の歴史のなかで, <青年>と言われる新たなタイプの文化と価値をもった層がある時期登場し, 前世代との価値的連続性を失い, 葛藤を繰り返しながら, 次第に遊離した層として独立する過程が存在するという点になり, その点の解明が求められると言えるだろう。

本論では, 以上のような観点から, 我が国の近代化過程を事例として, そこでどのようにして <青年期> が発見されていったのかを検証していきたい。青年期概念の歴史的成立過程について, 藤田 (前掲) は, 1) 青年期未分化, 2) 青年期の発見, 3) 青年期の制度化, 4) 青年期の大衆化, 5) 青年期の長期化と常態化, の5段階に分類している²⁾。この中で本論が焦点を合わせていくのは2段階から3段階の時期である。ただし, ヨーロッパでは18世紀以前に青年期が発見され, 19世紀以後, 国民国家の成立とともに公教育が整備されたことによって <青年期の制度化> が始まったと考えられるのに対して, 我が国の場合にはかなり条件が異なることを念頭に置いておかなければならない。なによりも, 我が国の学校教育は急速な近代国家の建設と統合のために制度化されたものであり, その点では青年期概念が必ずしも先行して成立していたわけではないのである。しかも, 明治期を考えれば, 中等教育が全国的に整備され就学率が飛躍的に上昇するのは明治30年半ば以降のことである³⁾。したがって, 青年期概念は, 社会における青年の位置付けと学校教育の拡大とが相互に影響しあっていくなかで, <青年期の発見> と <制度化> とが同時進行していったと考えるのが妥当である。

ともあれ, 我が国の近代化過程において, 前世代が若者層を「未熟な大人」⁴⁾ または「真成の狂人」⁵⁾ というレッテルではなく, 新たな青年期概念によって彼らの行動をくくるようになる過程が見い出されなければならない (青年期の発見)。そして, 同時にそうした青年層を社会的制度のなかでどのように位置付けるべきなのかという点についての議論がなされるはずである。つまり, <中間層> として遊離した層をどこで社会化すべきか, とりわけ, 長期化する学校教育の在り方が問われることになる⁶⁾。それまで人材養成機関としての機能を期待されてきた中等教育以上の学校は明治後期に至って, 青年の収容機関, 管理統制機関としての機能を含むようになったと考えられる (青年期の制度化)。この2つの課題のうち, 本論では前者に限定して以下で考察していきたい。

2: 分析の方法

前報告での考察では, 明治後期に出版された『青年修養論』に類する文献をもとに, 当時の青年に対する社会認識を概観した (加藤, 1989, 参照)。本論では, 明治中期から後期 (一部大正初期におよぶ) にジャーナリズムに発表された <青年問題> に関する記事を整理することにより, <過渡期> としての明治後期において, 青年期を積極的に位置付けようとする議論と逆に前世代との不連続を社会病理問題とする論とが交錯する状況を見出した。

具体的方法としては『中央公論』と『太陽』 (博文館刊) の二誌を中心に取り上げた。これらを取り上げた理由としては, 該当時期を広くカバーし, かつ比較的価値中立的な議論が含ま

れているということからである。もちろん、今後他の雑誌との比較検討が必要であることは言うまでもない。記事の採集については次のような基準を設けて行った。

- 1：「青年」を直接タイトルに含むもの
- 2：明治後期をマクロにとらえ、そこでの過渡的な時代状況、価値変動を表すもの。
- 3：学校問題、教育問題として表れた青年をめぐる周辺の記事

なお、以下の論中において、『太陽』および『中央公論』からの主要記事の引用箇所については、参照のため本文中に明記する（『中央公論』に関しては『中公』と略す）。

3：青年期の年齢的定義

青年期論の先駆的研究であるホルの著書『青年期』が我が国に紹介されたのは明治43年のことである（ホル、1910）。しかし、実際に近代的定義による青年期概念が我が国において定着するのはさらに後のことである。おそらく、それは大正期から昭和初期にかけて急速に定着していったと考えられる。例えば、昭和10年に刊行された青木誠四郎著『青年心理』では、青年期は〈自我の発見〉という心理的特徴によって明確に他の段階とは区別される時期として位置付けられている⁷⁾。このことを学説史から離れて、一般世論の中で見直してみると、実はすでに明治30年代のなかばから、自己の存立基盤にたいする問いかけが青年期特有の態度として見い出され始め、彼らが社会制度のなかで位置づきにくい存在になっていることがわかる。そこで、まずは〈青年の範囲〉について言及されたものをひろってみよう。明治2年生まれの文学者兼ジャーナリストであった大町桂月は、彼の著書『青年時代』（大町、明治41年、参照）の中で、青年期の範囲についてつぎのように言っている。

「学齢に達するまでが幼年也。学齢より十五六歳まで、即ち小学なら高等科二年を卒業し、中学なら二年を卒業するまでが、少年也。十六七歳より二十五六歳まで、即ち中学、高等学校、大学に学びつつある間が青年なり」⁸⁾

当時の世論が青年を中等教育以上の学歴をもつ男子と見なしていることは、他の論者にも共通である。藤井健治郎（明治4年生まれ、早大教授、倫理学）も明治三十年代の「学校の隆盛」が中間的な集団を生み出したと論じている。彼の定義によれば、青年とは「中学校、高等女学校の上級以上にある男女」そして、「三、四年以前頃に」卒業しながら「今日まで終始不惑に達しない程の人々」なのである（以上、藤井健治郎「教育と小説」『太陽』明治39年9月、p. 125.）。もちろん、ここで言う「不惑」とは当時の煩悶青年を念頭においた言葉だろう。いずれにせよ、明治30年代に整ってきた中等、高等教育の接続とそれに伴う量的拡大を〈青年期〉登場の社会的背景とみなすことについては異論はなさそうである。

4：時代精神の犠牲としての煩悶青年

それでは、青年と呼ばれる層を、世論はどのような認識でもって眺めていたのだろうか。おしなべて言えば、前世代そして政策担当者たちの青年にたいする評価は芳しいものではなかった。つまり、〈風紀紊乱〉、〈意志薄弱〉、〈本能主義〉等の警句が青年たちに投げかけられたのだった⁹⁾。それらはとりわけ学生を批判したものであった。例えば、血来山人のペンネームで書かれた「青年の二大通弊」なる記事では、学生が次のように批判されている。

「現今の青年は社会を知らざる也。人情を解さざる也。義理を知らざる也。学ばざる也。所

謂学生なる一社会を作りて此中に浮遊す。井蛙のそしり遂に免るべからず」(血来山人「青年の二大通弊」『中公』明治38年2月, p. 61.)

また、明治後期から大正期にかけて、盛んに青年修養論を主張する徳富蘇峰(1863年生まれ)は、「人間は何処から生まれてきたかどう、何処へ行くのかがわからぬ」(徳富「当今の青年と社会の気風」『中公』明治38年1月, p. 23)と云って煩悶する青年の心理について、それは興味あることだが不思議な事であると評し、全く理解を示さない。しかしながら、他方では、〈浮遊〉した心理状況を示す青年層を、日本の社会変動の過程で見出された新たなステージとして積極的に位置付けようとする主張が、少なからず存在していた。例えば、姉崎正治(明治5年生まれ)は、個人の一生には「親戚とか業務とか関係累縁」(p. 82.)ができる以前の一時期「我れと我の生存、即ち人生に関して疑問が続出する」(p. 82)のは当然のことだとして、明確に青年期を認めようとした。もし、青年たちが墮落し元気を失っているとすれば、それは「旧信仰」(伝統的規範：筆者)が失われていまだ「之に代る新信仰」がまだ定まらないという社会状況が生み出した「時代精神の犠牲」¹⁰⁾であるという見方が出てくるのは当然である(以上、姉崎「現時青年の苦悶について」『太陽』明治36年8月)。さらに、青年期を積極的に受け入れる論者は、政策担当者の課題として、青年たちをどのような制度の中で社会化するのが論じられている。当時の青年対策は、明治39年の訓令に見られるような[隔離政策]とも言えるものであった。だが、世論はこれに対しては極めて手厳しい。つまり、すでに前世代と次世代(青年層)との価値的連続性をつけることは不可能である。むしろ、青年の「我れの自由の発露」(姉崎「前掲」p. 83.)を保障し「萎縮」(同前)させないようにするのが、拡散的心理状況に陥っている青年の救済策であると主張している。このような論者に言わせると、青年期の発見は一個人の問題のみならず、[国または社会]の青年期ともいえる時代が明治後期に訪れたということになる。そこで、この煩悶青年をめぐる議論を以下でもう少し詳細に検討してみよう。その際、煩悶青年についての先行研究を総括的に取り入れ、日本の近代化の中に位置付けたKINMONTH(1981)の分析をレビューし、さらに彼の方法論の限界を指摘しておきたい。

5：KINMONTHの方法

KINMONTH(1981)は、煩悶青年を、明治の社会構造の変化によって説明する試みを行っている。彼は、当時のジャーナリズム、自叙伝を包括的に吟味した上で、いくつかの問題を説明しようとしている。まず彼は、それまで日本の近代史研究を再検討するために次のような問いかけを提出している¹¹⁾。

- 1、自己懷疑的な青年の出現は西欧の個人主義思想、虚無主義の流入と流行による現象なのか。
- 2、日露戦争の勝利によって明治維新後の国家目標が失われ、青年の方向性が定まらなくなったことによるのか。
- 3、学校という制度のなかに囲い込まれた若者たちが、詰め込み式(cramming)教育によって欲求不満に陥り、その吐き口として文学、享楽に耽溺する若者文化が現れたのか。

まず、1について彼は、明治後期の青年層、とりわけ教育ある青年の中に広く自己懷疑的な文化が見られることから、必ずしもニーチェやドイツロマン主義の洗礼を受けたものみの特徴に限ることはできないと結論づけている。また、明治中期から後期の世論を時系列的に検討することによって、煩悶青年、耽溺青年といったタイプの若者はすでに明治20年代から現れて

いることを指摘し、そのことにより2の説明に対しても否定的である。最後に3の説明についてであるが、確かにKINMONTHは教育制度と青年の価値状況との関係については大きな関心を示している。しかし、煩悶青年文化の巣窟ともいえる旧制高等学校の学生生活はさして厳しいものではないし、トコロテン式 (pass 'em out)¹²⁾の大学進学が保障されており、言わばパラダイスであったと指摘している。したがって、教育内部の処遇が青年の思考、行動様式を決定したという説明はできないと主張している。そこで、彼は別の因果要因を捜すが、なかでも注目されるのが、青年をとりまく教育の社会的状況という環境要因 (environmental factor)¹³⁾である。つまり、高等教育の拡大と限られた職業市場が生みだした学歴インフレによって、青年の立身出世機会が閉ざされつつあり、その結果、フラストレーションを抱えた青年たちがその代償を何らかに見い出そうとしていたという、見田(1968)の説明を支持している。彼に依れば、明治後期の社会が抱えていたアノミー的な価値状況や思想的転換よりも、むしろ、青年が置かれた具体的な環境の変化(立身出世機会の閉塞)が明治後期の青年の行動様式を説明するのである。

しかしながら、本論ではつぎの観点から、同じ時期のジャーナリズムを見直してみたい。まず、KINMONTHの方法である、青年の行動、思考様式の説明変数を、青年に直接的に影響を与える教育構造の変化に求めるという定式化をひとまずはなれてみたい。というのは、この時期の青年文化を教育構造の変化という一つの要因によって説明することは、青年が影響を受けたらう様々な思想変化、文学等の社会的雰囲気というべきものを捨象することにもなると考えるからである。本論ではむしろ青年の行動、思考様式を説明する要因析出より、そうした〈特異〉な青年の下位文化と譜合するマクロな社会状況もしくは日本の近代化過程におけるある歴史的段階が明治後期に到来し、そのことを前世代はどう受け止めていたのかを世論の中にみいだしたい。彼らの社会認識の中にこそ、次第に長期化する学校教育の中に収容されるようになる青年たちを否定的にではなく、ライフ・サイクルの中に位置付ける、いわば青年期概念が発見され、成立していく過程があると考えられるのではないだろうか。そこで節をあらため、KINMONTHも取り上げている姉崎正治の議論を今一度取り上げてみよう。

6：近代化と青年期の発見—姉崎の青年論をめぐって—

姉崎は明治5年、京都に生まれ、28年に帝国大学文科を卒業したのち、キール、ベルリン、ライプチヒの大学で学び、帰国後帝国大学で宗教学を講ずるようになった。彼の論壇への影響力はかなり大きなものがあったらしい。石橋湛山は当時、早大で非常勤講師として宗教学を教えていた姉崎が、学生達に絶大な人気をもち、いわば当時のジャーナリズムの売れっ子であったと回顧している¹⁴⁾。

さて、彼が帰国直後に発表した青年論の論旨をKINMONTHにしたがって要約すると、当時の青年が制度化された学校教育の中で〈定形〉にはまりすぎており、それがフラストレーションとなり、煩悶青年を生む原因となるというものである。しかしながら、これは姉崎が展開している論説の一部に過ぎず、彼の一連の記事で主張されているのはもっとマクロな視点である。姉崎の論で特筆すべきは、彼が当時の青年の風潮を規範からの逸脱とはとらえていなかった点である。先にも触れたが、彼が明治36年8月『太陽』に発表した「現時青年の苦悩」なる論説では、「世間の老成先輩が頻に青年の間に行われておるといふ青年の苦悩について心配しておられるという消息」(p.80.)とは全く逆の見解で煩悶青年を評価している。

「最も鋭敏に人間天性の声を識別する青年が、長夜の眠から覚めた様に〈我れ〉を求め人生問題に頭を入れ始めたといふ事は、自然の理数である。従て其れから生ずる苦悶が人心を支配せんとするのも決して驚くべき事ではない。若し今の世の青年に此の如き苦悶が行われておるのなれば、此れは大いに歎ぶべき事である」(p. 80.)

ここで彼が言う、「自然の理数」とは心理的発達段階をも含むと考えられるが、論文の全体文脈から言えば、煩悶青年出現の必然性を、社会もしくは国家の発展段階に帰結させているようである。さらに、例えば、別の箇所では次のようにも述べている。

「人間といふ者は、之れを一個人の上からいっても又一国或は人類全体からいふても、其一生活の中には一度は自覚を明にせざるを得ない運命を持っておる。言を換へていへば「我とは何であるか」、「何の為に我は存在するか」といふ問題に逢着して此を如何様にか解釈すべき、又其解釈に従て生きる、死ぬかの運命を試みる必至の性能を有する。」(p. 80.)

それでは、社会もしくは国家の自覚とも言うべき精神がなぜ起こってきたのか、その点についてはここでは明確にされていないが、姉崎は後に別の記事の中でこう述べている。

「社会にすれば、即ち過渡の時期は人々が古き物にも着かれず新しきにも慣れざる懊悩煩悶の境に属する。……此の如きは過渡期の苦痛の一つのみ。若しそれ今日礼風廃退といひ、学生墮落といふが如き声もその大部分は此の如き過渡期の際に生ずる闘ひの声なるを思えば、過渡の苦痛は正しく今日の如き時代の人心に最も感ぜらるる事実にあらずや。」(姉崎「過渡の苦痛」『太陽』明治39年12月, p. 53.)

ここで言う「過渡期の苦痛」とは、概念化して言えば、維新以後の日本の近代化が転換点をむかえ、既存の社会構造と新しい価値観をもった青年の志向とが齟齬をきたしているということだろう。例えば、伝統的な家族の崩壊について、彼はこう言っている。

「今迄の家族主義の形式、即ち先に言った様な部落単位風の形式が新時代の活動又人情に副わない為めその様な家族主義の勢力が地に墜ちかけて、而かもその形式が圧迫の苦痛を与え、之れに反抗しようとして反動的に放埒の風を養った」(姉崎「前掲」p. 58.)

さらに、当時の拜金主義をして「商業道德の卑劣」(p. 58.)と非難する声に対しても、家族規範と同様に「社会の一手足とする道德が棄たれて、之れに代はる道德勢力の乏しい今の世に、この気風が起こるのは必然の病患であろう」(p. 58.)と対象化して述べ、あらゆる社会制度、価値がアノミックな様相を呈していることを指摘している。すなわち、「青年の現今の気風を嫌ふ人は多くは此の弊を青年の特有病の如くに見て、青年を呪咀する」(p. 58.)が、彼のマクロな視点では「この病は独り青年のみでなく、街上や電車の公德にも、実業会、政治社会の広義にも現はれてをる」(p. 58.)のである。

このような彼の議論の全体から教育と煩悶青年の関係について言えば、姉崎が学校教育の圧迫を問題にすると、それは、青年の気風を説明する要因というより、むしろ逆に青年対策としての〈検束主義〉を戒めているのである。つまり、青年の煩悶状態を「精神の内部からも社会の外部からも之れを圧抑えようとすれば、青年は先ず之れと闘わざるを得な」(pp. 54-55)くなり、いっそう心理的拡散は深くなるというのである(以上、姉崎「過渡の苦痛」)。

ここまで、姉崎の議論を検討してきたのは、それは彼ひとりの議論をことさら取り上げるためではなく、実は政府による警鐘や青年修養論とはうらはらに、青年期を明治維新以後の近代化と関連づけて捉えようとする視点が芽生えはじめてきていたからである。例えば、1852年生まれで、いわば煩悶青年にとっては前世代に属する島田三郎でさえ、つぎのように言っている。

「急に服従主義の解けた今日、人々の良心の判断に従ひ道に従ふ責任を解して行為することの出来ぬところから此の紊乱を来したのであって、之れは已むを得ないことである。一時紐

の解けた場合、是れくらいな紊乱は当然のこととおもはねばならない。」島田三郎「此位の道徳紊乱は当たり前なり」『中公』、明治36年1月）。

大正期まで続くそうした状況の背景は、新渡戸稲造（1862年生まれ）が言うように「生存競争が烈しくなった為に、目の前の目的を得んが為め、日夜齷齪して狂奔する事、従って何物についても悠揚として精神を養ふ事の出来ない事情」（新渡戸「現今の青年と人生に対する根本信念」『中公』大正5年1月、p.166.）に求めることも可能だが、煩悶世代である和辻哲郎（明治22年生まれ）はむしろ青年を包んでいる〈時代精神〉すなわち価値状況が揺らいでいることを次のように指摘している。

「危険はこれらの一切が雑然としている所にあります。そこには全体を支配し統一するテーマがありません。したがって総てがバラバラです。」（和辻「すべての芽を培へ」『中公』大正6年4月、p.126.）。

また、戸川秋骨（本名：昭三、明治3年生まれ）は日露戦争に際して青年が「冷静の態度」（p.38.）にでたことを、「儉勤を説き尚武を励むるが如き、口に忠孝を称せざれば愛国者にあらず」（p.39.）といった狭義の国家主義で批判することを否定し、青年の思想を検束せず、「世界主義」（p.41.）こそが煩悶の救済策であると主張している（以上、戸川「机上小観－5、所謂煩悶の一側面－」『中公』明治39年8月）。ここで世界主義なる思想が出されてきたのは、狭義の日本主義がすでに青年たちにとってコミットすべきイデオロギーにならなくなった状況のなかで、なんらかの代替イデオロギーを求める必要性が生まれていることのあらわれだろう。

おしなべて言えば、青年肯定論者に共通しているのは、当時の青年の不安定な心理状態は「現時欧米及び日本に於ける青年の特徴にして文明の進歩に対する一種の犠牲なり」（浮田和民「現時の青年に告ぐ」『太陽』、明治42年8月、p.6.）という視点である。このことをさらに図式化したのは、〈文化遅滞説〉ともいべき藤井健治郎の論である。藤井は姉崎と同じく明治5年に生まれている。彼らは帝国大学時代より話相手であり、両者が親しく付き合っていた人物に、一年うえの高山樗牛がいたことは見逃せない。さらに言えば、藤井は同じ山形出身の樗牛の後を追って帝国大学文科に入ったという¹⁵⁾。

さて、少し長くなるかもしれないが、彼が考える近代化と青年についての議論を引用してみよう。

「有形上の変動は之を無形の変動に比ぶれば流石に移り変り易い。従って日本も有形上の文明は出来能ふだけの速さを以て西洋のものを取り得たのである。然るに無形上の変動は然く速かなることを得ずして、よし形は変じて心は依然として昔の儘一身には洋服を着けても心にはチョン髷を戴いているという様な事もあって、かくて日本も精神上の移動は物質上の移動よりも後に出て来たので、私の観察によれば恰ど明治30年頃からして、我が歴史は精神上の変動に逢着した様に思ふ。即ち精神上の所謂過渡なるものは、私の考では約明治30年ころより以後の事と信ずるのである。〈中略〉国民一般が変動に漂ひ過渡を感ずる様になったのは、確かに明治30年頃以後の事と信ずる。」（藤井「教育と小説」『太陽』明治41年1月、p.126.）

いってみれば、煩悶青年たちは、それまで思想的には〈主体的自我〉が浸透しつつあったにもかかわらず、制度的には国家統合機能が強化されていった明治後期の社会の中で、個人と社会との拮抗が尖鋭的な形であられたものといえる。このようにして、明治後期に析出された新しいタイプの青年層がもつ行動、思考様式は、次第に前世代層のもつ価値観と葛藤を繰り返しつつ次第に遊離していき、その過程で青年期を大人期とを不連続的なものとして捉える認識を強いていったのではないだろうか。当時の知識人たちは、この位置付きの悪い層を、生理的

・心理的発達段階として説明しようとしたり、青年期という新たなステップとして猶予期間を与えるべきだと主張したり、逆に学校教育のなかでさらに強力に社会化すべきだと主張したりしており、青年期の発見に戸惑っているようにも思える。青年期が次第に独立して定着してくる状況を、姉崎等と同世代に属するジャーナリストである田中穂積（明治8年生まれ：東京毎日新聞主宰、早大教授歴任）が、漠然とした印象ではあるが次のように表現している。彼は煩悶青年と僅か10年ほどの年齢差を持つにすぎないが、明らかに当時の青年が自分と異なったライフ・サイクルを歩み始めていたことを感じていた。

「予の見る所によれば今の学生は次第に晩熟になりぬ。常識の発達遅くなりぬ。」〈何故なら〉
 「生存競争は月を追ひ日を追ひて激甚を加ふるに非ずや。従って又寸時も早く青年の大成を期するに非ずや。現時に於いては高等教育を受くるもの其数何万をもって註すべきも、如何せんその才の成熟は甚だ遅緩になりぬ。」（田中「現代の青年」『中公』明治42年10月，pp. 21-22.）
 （〈 〉 内筆者）

晩熟になったとは、とりもなおさず〈子供〉でもなければ〈大人〉とも連続性を持たない、移行期として青年期が長期化したことを意味している。かつてのように通過儀礼によって、または制度化された大人世界への参入（例えば若衆宿など）によって子供期から短期的に大人期に移行していった若者たちは、ここに至って、伝統的な価値軸を失い、根こそぎ状態になり、しかも職業世界から分断された学校に囲い込まれることによって、定義しにくい時期を過ごさなくてはならなくなった。皮肉にも、そのことが青年期というステージが社会的に明確になっていく過程でもあったのだ。

これまで、当時のジャーナリズムにあらわれた、青年と社会との関係をめぐる議論の一端を概観してきた。確かにかつて前世代をして、「精神が少し狂って居るに違ひない」（加藤弘之の「青年の煩悶に就いて」『太陽』明治39年9月，p. 41.）と言わしめた煩悶青年であるが、一方で彼らの自由な精神の発露を保護すべきだという主張がこの時期強くなっていくことがわかる。とはいえ、ここでの検討は飽くまで、青年についての新しい社会認識、それも論壇という限られた、知識人たちの場でのものであった。次にこれらの青年論が大正期にどのような展開を示すのか見なければならぬ。それというのは、やがて、杉森孝次郎（明治14年生まれ）、和辻哲郎（明治22年生まれ）のような煩悶青年世代自身が論壇のオピニオン・リーダーとなっていくからである。彼らが自己自身の青年期をどのように対象化していくかは興味深い。

7：結 語—残された課題と展望—

本論では、明治後期に芽生え始めた〈青年期概念〉がいかなるものであったのか、そのことを、当時の世論をもとに明らかにしようと試みた。この作業自体は今後継続的に深めなければならないが、分析の枠組みはさらに広がるべき性質のものであることも確認しておかなければならない。ここでは、方法の枠として〈構造〉、〈政策〉、〈意識〉の3つにわけてみたい。

1) 構造：明治後期に青年層の心理もしくは価値観は国家から遊離し〈私化〉していった（丸山，1968）。そのことは、現実生活レベルと何らかの相互作用をもっていたと考えられる。つまり、家族構造、若者分化などあらゆるライフ・スタイル自体が現実のものとして〈個人化〉していった過程を追ってみなければならない。現実レベルでの生活構造の変化がいかにドラステックなものであったかは、当時の前世代たちが侮蔑を含めて青年のマイホーム主義とも

いえる生活感を評していることからわかる。例えば、明治後期には次のような記事が目につく。

「一体が今の青年は国家だの天下だのと、大きいことを心掛けるより、早く相当の月給でも取って、女房を貰い、子供をこさえ、円満な家族でも作って、楽しく暮らすといふ考へだから、突飛の豪傑のない代わり、文明的の好紳士が沢山出来る勘定」(「現今の青年」『中公』明治38年2月, p. 61: 読売新聞からの再掲記事)

日本の学生はいよいよ同じことになる。勉強をする、肺病やみのやうになる、而して学校を出る。其目的は何か。先ず家を造って、月給を貰って、相当な妻君を貰って、縁日の晩には花を買ひに行く—これは誠に困ったもの、常識といふものは我々はそういふ積もりで言ったのではない。常識といふものは小家族を目的とすることになってしまった。(竹越與三郎「青年とアンビション」『中公』明治41年4月, p. 23.)

2) 政策：社会的に位置付きにくい青年層の社会化または教化をめぐるいかなる議論が起こったのか、とりわけ、拡大する学校教育の質・量の双方についての再編が議論される過程を整理しなければならない。

3) 意識：アリエス以来の社会史研究での中心的関心であった、日常世界での人々のメンタリティーを探る試みは、ここでもなされなければならない。そこには、世論や文教政策とは全く異なった内的世界が存在する可能性さえある。また、青年層がどこまで普遍化できる概念であるかもいまの段階では断言できない。すなわち、階層または都市—地方について青年の意識についての個別の中身を明らかにしなければならない。

これら諸側面からの青年期へのアプローチをさらに時系列的につなぎあわせることにより、その延長上に現代青年の意識構造分析への展望と可能性が生まれてくるのではないだろうか。そのことが、本研究の長期的枠組みでもあることを最後に記しておきたい。

〈参考文献および論文目録〉(本文登場順：戦前のものについては元号を使用)

- Dornbusch, M., 1889, The Sociology of Adolescence. Annual Review of Sociology. Vol. 15.
- Aries, P., 1960 L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Regime; Paris (杉山光信他 訳『<子供>の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房, 1980)
- Mead, M., 1928, Coming of age in Samoa: A psychological study of primitive youth for Western civilization: William Morrow. (畑中幸子他訳『サモアの思春期』蒼樹書房, 1976)
- Erikson, E., Identity and the Life Cycle. International University Press. 1959.
- 中川作一『青年心理学』法政大学出版局, 1959.
- 藤田英典「青年期への社会学的接近」, 西平直喜, 久世敏雄編『青年心理学ハンドブック』福村出版, 1988.
- 加藤 潤「近代日本における青年の自我構造に関する一試考—明治後期の青年像：その1」名古屋女子大学研究紀要(人文・社会編), 第35号, 1989.
- Hall, G. S., Adolescence: Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion, and education. 2 vols., Appleton. 1904 (元良勇次郎, 中島力造他訳『青年期の研究』同文館, 明治43年).
- Kinmonth, H., The Self Made Man in Meiji Japanese Thought, Univ. of California Press.
- 見田宗介『現代日本の精神構造』弘文堂, 1966.
- 大町桂月『青年時代』大倉書店, 明治41年.

丸山真男「個人析出のさまざまなパターン—近代日本をケースとして」ジャンセン編, 細谷千博編
訳『日本における近代化の問題』岩波書店, 1968年.

〈註〉

- 1) 藤田英典「青年期への社会学的接近」, 西平, 久世編『青年心理学ハンドブック』, p.145.
- 2) 同上書, pp.149-150.
- 3) 周知のとおり, 明治20年代を通じて, 高等中学校との制度的接続は極めて不十分なものであり, 多くの卒業生が浪人を余儀なくされた. 制度的に中学校, 高等学校のつながりがつくのは, 明治32年の「中学校令」改正をはじめとする一連の学制改革以後のことである (内田純『明治期学制改革の研究—井上毅文相期を中心として—』第一書房, 1968. 参照). また, 中等教育就学率変化をみても, 明治28年, 1.1%. 33年, 2.9%. 38年, 4.3%. 43年, 15.9%となっており, 明治後期の増加が際立っている (門脇他編「生活水準の歴史的推移」NIRA (総合研究開発機構) 1985, p.308より).
- 4) 加藤弘之「青年の煩悶について」『中央公論』明治39年10月, p.41.
- 5) 同上
- 6) この点で, 19世紀のアメリカにおける学校教育改革がもつイデオロギー的意図を解明したM・カッツは, 学校推進者たちが, 青年期の危機にある若者たちの救済策として学校教育に幻想的な期待を抱いていたと指摘しているが, そこには, 我が国においても検討すべきいくつかの課題が含まれている (M. B カッツ著, 藤田英典他訳『階級・官僚制と学校』有信堂, 1989. 「<公教育の起源> 再考」参照).
- 7) 青木誠四郎『青年心理』叢文閣, 昭和10年, 第1章, 「自我の発見」参照.
- 8) 大町桂月『青年時代』大倉書店, 明治41年, p. 2.
- 9) その代表的な論調は次のようなものであった.
「世の無数の青年を墮落せしむるものは, 即ちこの本能主義なり. 深く道德の何物たるを研究せずして, 道德の積極的の意味を解せず, 全く情欲を制裁するといふ消極的の意味のみなりと妄想し, 人間の目的は却って情欲を充足することにあることを主張し, これを世に伝播せんことを努むる」(井上哲次郎「日本社会現下の弊害」『中央公論』明治36年1月, p.10)
- 10) 林田春潮「時代精新の犠牲(-), (二)」『中央公論』明治34年8月および9月を参照.
- 11) H. Kinmonth. The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought—from Samurai to Salary Man, Univ. of California Press, 1981. とくに第6章, 「煩悶青年」(Anguished Youth) は本論の関心と共有部分が大きいことから, 以下の考察では同章を参考にする.
- 12) I bid., p.215.
- 13) I bid., p.215 or p.228.
- 14) 石橋湛山『湛山回想』岩波文庫, 第2章「明治の学生」(pp.48-85) に詳しい.
- 15) 渡辺和靖『明治思想史—儒教的伝統と近代認識論』増補版, 1985, p.261.